本州から来た毒ガエル　～国内外来種アズマヒキガエルの影響を探る～
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 岸田治

皆さんは外来種といえばどんな種を思い浮かべますか？　北海道の川や湖にすむブラウントラウトやニジマスでしょうか。あちこち見かけるアライグマやミンクでしょうか。数年前に大ニュースにもなったヒアリのことを想像する人も少なくないかもしれません。いずれにせよ、ほとんどの人は異国の地から海を越えて日本へとやってきた種を真っ先に挙げるはずです。しかし、外来種は外国から来たものだけではありません。日本国内においても本来の分布域とは異なる地域へと人為的に移入された種が多くいます。普通、人や物資の往来は、国と国との間より国内において盛んです。また、外国の種に比べ、馴染みのある日本の種については、本来の分布域の外でも、野外に放すことに心理的な抵抗が小さいかもしれません。これらの理由により、国外種よりも国内種のほうが移入の可能性は高いと考えられ、その影響についても注意を払う必要があります。ところが、国外外来種と比べ国内外来種を対象とした研究は少なく、ほとんどのケースで影響の全体像は明らかになっていません。

ここでは、本州から北海道へと移入された国内外来種のアズマヒキガエルに焦点をあてます。本州原産のアズマヒキガエル（以下、ヒキガエル）は、旭川、石狩、函館、室蘭など道内各地で見られます。ヒキガエルが爆発的に増え、分布も拡大している近年、在来種への影響が強く懸念されるようになってきました。私たちの研究グループでは、ヒキガエルの影響について、特にヒキガエルと同じ両生類であるエゾアカガエルとエゾサンショウウオに注目して調べています。在来種の産卵した池でヒキガエルが産卵すると、やがて孵化した胚や幼生（オタマジャクシ）たちが出会います。エゾアカガエルとエゾサンショウウオはヒキガエルの孵化直後の胚や幼生を食べるのですが、これらの在来両生類はヒキガエルがもつ毒性物質（ブフォトキシン）の影響を受けやすく、成長が悪くなったり、死んでしまうことがわかりました。講演では、実験や調査から明らかになってきたヒキガエルの影響の実態を紹介します。

産卵場へとやってきたアズマヒキガエルのペア（旭川市・5 月）

池を埋めつくすかのようなおびただしい数のアズマヒキガエル幼生（旭川市・6 月）